

三島由紀夫の「愚行」に涙を流しながら手を合わせる下町の人々

三島由紀夫の自決について、吉本隆明は自身が発行していた『試行』32号の「情況への発言——暫定的メモ——」(45・11・25 — 46・1・13)で、《三島由紀夫の劇的な割腹死・介錯による首はね。これは衝撃である。この自死の方法は、いくぶんか生きているものすべてを〈コケ〉にみせるだけの迫力をもっている》と、冒頭から書きだし、この「衝撃の質」を次のように言葉にしている。

《この自死の方法の凄まじさと、悲惨なばかりの〈檄文〉や〈辞世〉の歌の下らなさ、政治的行為としての見当外れの愚劣さ、自死にいたる過程を、あらかじめテレビカメラに映写させる所にあられた、大向うむけの〈醒めた計量〉の仕方等々の奇妙なアマルガムが、衝撃に色彩をあたえている。そして問いはここ数年来三島由紀夫にいただいていたのとおなじようにわたしにのこる。〈どこまで本気なのかね〉というように。つまり、わたしにはいちばん判りにくいところでかれは死んでいる。この問いにたいして三島の自死の方法の凄まじさだけが答えになっている。そしてこの答は一瞬〈おまえはなにをしてきたのか!〉と迫るだけの力をわたしに対してもっている。》

吉本にとって〈文武両道〉、〈男の涙〉、〈天皇陛下万歳〉等々を叫ぶような「愚行」であつたにもかかわらず、そして三島の自死を《政治行為的な死》とみる彼は、《その〈死〉の意味はけっきょく文学的な業績の本格さによってしか、まともには測れないものとなるにちがいない》と見当違いの診断をしてみせながらも、《三島の自死の方法の凄まじさ》は、《一瞬〈おまえはなにをしてきたのか!〉と迫るだけの力をわたしに対してもっている》と書かざるをえなくなるのだ。

もちろん、三島自身、自分の行動を「愚行」とは露ほども思っていなかった。しかし、自分の行動が周囲から、世間から、「愚行」とみなされることは充分承知していた。そのことを覚悟したうえでの行動であつた。学生と共に自衛隊に体験入隊したり、「楯の会」を結成したときから、三島は時代錯誤と嗤われてきたし、〈どこまで本気なのかね〉と首を傾げられてきた。これをやれば必ず愚行とみなされるという方向へと自分をひたすら駆り立てていった。

三島にとっての自死は《自死の方法の凄まじさ》としてしかありえなかった。その《自死の方法の凄まじさ》に、彼の自死にいたる行動のすべてが凝縮されていたはずである。その《自死の方法の凄まじさ》は、《劇的な割腹死・介錯による首はね》のかたちをとらなくても、何千万の敵にむかって「一人の日本刀の言論」を行使するために、日本刀で斬り込んでたちまち殴り殺されるようなかたちをとって、我々の前に示されていた。三島はそのような《自死の方法の凄まじさ》——戦後日本の安逸さのなかではどうしても自死は尋常ではない、激烈なかたちをとらざるをえなくなると彼自身考えていた——のなかに、自分の思想と行動のすべてを叩きこもうとしていたが、《つまらぬ哲学はつまらぬ行動を帰結する》と三島の行動をみていた吉本は自分の受けた衝撃によって、自身が裏切られていた。《つまらぬ哲学》が帰結する《つまらぬ行動》に衝撃は無縁であつたからだ。

三島の《自死の方法の凄まじさ》とはなにか。吉本はなにをもって、三島の自死の方法に《凄まじさ》を見出したのか。それは吉本の言うように、《真の反応は三島の優れた文学的業績の全重量を、一瞬のうち身体ごとぶつけて自爆してみせた動力的な総和によって測られる》ところに見出されるにちがいない。三島の《自死の方法の凄まじさ》は誰に対してでもなく、まず彼自身の《優れた文学的業績の全重量》に対して見舞われた。だが三島は自分の文学的業績を爆破してみせただけでなく、同時に文学そのものをも爆破してみせたのかもしれない。

三島は自分の文学的業績なるものすべてを〈コケ〉にしてみせた。だからこそ吉本は、《この自死の方法は、いくぶんか生きているものすべてを〈コケ〉にみせるだけの迫力をもっている》と読みとり、文学や思想をやっている者たちすべてに対して、《〈おまえはなにをしてきたのか!〉と迫るだけの力》をもっているのを認めざるをえなかったのだ。更に、三島の《自死の方法の凄まじさ》は、三島の作品を一度も読んだことがない者はおろか、三島の名前すら知らない者たちに対しても三島を知らしめ、彼らを三島の行動の一瞬の〈読者〉にしてしまった。この影響は、これまで三島の文学に縁がなかった者たちを彼の作品世界に引き込む、非常に効果的な最大のパフォーマンスとしての意味をもったし、《自死の方法の凄まじさ》を念頭にした読者層を開拓したかもしれない。

読者は作家の文章を通じてその作品世界へと入りこむが、《自死の方法の凄まじさ》を世間に周知せしめた以降、三島の読者はもはや完結された作品そのものの世界として彼の作品に接することがで

きなくなり、事件につながる痕跡をどこかに探しながら読むようになってしまった。作品と行動とは区別されなくてはならないとは、とてもいえなくなった。自衛隊に乱入して苛烈な割腹自決を行ってみせた作家の小説とかエッセーのイメージを拭い去ることは不可能になった。その意味では、三島は自分の《優れた文学的業績の全重量を、一瞬のうち^{ぐい}身体ごとぶつけて自爆してみせた》というより、《自死の方法の凄まじさ》という二度と抜けぬ杭を自分の文学的業績のど真ん中に打ち込んだといえる。読者は彼の小説を手にするとき、その太い杭で打ち抜かれた小説を手にはせざるをえなかったのだ。

三島は6月18日夜の安保デモを記者クラブのバルコニー上からながめながら、安保デモの中に、《政府にとつての政治的危機であると同時に、民衆にとつての政治的危機》を見出していた。《社会党の審議拒否も、全学連の国会突入も、政府の単独採決も、みな同じ「議会主義を守るために」といふスローガンの下になされてゐる。民主主義といふ言葉は、いまや代議制議会制度そのものから共産主義革命までのすべてを包含してゐる。平和とは時には革命のことであり、自由とは時には反動政治のことである。(中略)政治が今日ほど日本語の混乱を有効に利用したことはない。私はものを書く人間の現代喫緊の任務は、言葉をそれぞれ本来の古典的歴史的概念へ連れ戻すことだと痛感せずにはゐられなかった。》(「一つの政治的意見」毎日 35.6.25)

60安保の大衆デモを見下ろしているこの「記者クラブのバルコニー」は、十年後には自衛隊員を見下ろしながらアジ演説を行う正面バルコニーに変化していた。《歴史的概念はゆがめられ、変形され、一つの言葉が正反対の意味を含んでゐる》といった新聞の中の語調も、十年後には「檄」文の中の「われわれは戦後の日本が、経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失ひ、本を正さずして末に走り、その場しのぎと偽善に陥り、自ら魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た」という語調へと尖っていた。

《言葉をそれぞれ本来の古典的歴史的概念へ連れ戻す》者は、《ものを書く人間》を措いてほかにいなかった。三島が《ものを書く人間の現代喫緊の任務》として痛感していたなら、他の誰よりも三島自身がその任を背負わなくてはならなかった。もちろん、この問題は《ものを書く人間》が書斎の中でおとなしく頭をひねっているだけでは解決しえない。問題は書斎の中ではなく、まさしく書斎の外の大衆デモの中で発生していたからだ。三島は《記者クラブのバルコニーから、さまざまな政治的スローガンをかけたプラカードを見まはしながら》、安保デモの中に《日本語の極度の混乱》だけを目のあたりにしていたといえる。《歴史的概念はゆがめられ、変形され、一つの言葉が正反対の意味を含んでゐる》、とんでもない光景を発見し、目撃していた。書斎の中では全く見られない衝撃的な光景に震撼していたのだ。もはや安保どころではなく、日本という国の存立にかかわる日本語の危機を見てとった三島にとっては、《ものを書く人間》の危機にほかならなかった。その危機に《ものを書く人間》である、自分を含むどの文学者も対応しえないという自覚が三島にはあった。

安保闘争の大衆デモの中で生命の危険にさらされた吉本は、《おまえはどのような政治的実効性とならば生命を交換しうるかという自問のバリケード》を自らに発して大衆行動と手を切り、膨大な「思想の言葉」に自分の活路を見出すことになったのとは反対に、その大衆デモを傍観者として眺めていた三島は、そこに《日本語の極度の混乱》を見出して「文学の言葉」の危機を感じ取りながら、やがて「行動する言葉」に命をかけていく方向へと駆け抜けていった。

「本葬は、築地本願寺で行われた。

会葬者の服装が異様だった。

モーニングや、喪服の人はほとんどいない。

ノーネクタイは当たり前で、下駄ばき、サンダルばきという姿の人たちばかり。

一万二千人にのぼった会葬者からは、大衆の匂いが立ち上っていた。

草履を履いて赤ん坊を背負ったお婆さんが、目に涙をあふれさせて、熱心に手を合わせている。

賽銭のつもりなのか、中年の男性が、千円札を祭壇に投げ、風に煽られて戻ってきた紙幣を係員が必死においかけている。

三島の義挙を理解し、心動かしてくれたのは、インテリでも政治家でも役人でもなく、市井の、下積みの人々だった。

その事だけでも、三島は報われたろう。」

福田和也は連載「思惟の畔にて」の「三島由紀夫」の項(『新潮45』13.4)で、おそらく誰も触れていない、三島の文学におよそ縁のない下町の人々が涙を流しながら手を合わせている彼の葬儀の光景を書きとめている。

